成瀬仁蔵年譜

西暦	年号	年齢	事歴	関連事項 教育事項	関連事項 一般事項
一八五八	安政五		六月二三日周防国吉敷村（今の山口県山口市吉敷）に長州藩士成瀬小左衛門　歌子の長男として生る　二蔵と名付く　後に仁蔵と改む　姉久子三歳	福沢諭吉蘭学塾を開く（慶応義塾の前身）	井伊直弼大老となる 日米修好通商条約調印
一八五九	安政六	一			桜田門外の変
一八六〇	万延一	二			和宮降嫁 アメリカ南北戦争始まる
一八六一	文久一	三	弟文吉生る（後に晋と改む）		坂下門外の変 生麦事件
一八六二	文久二	四			薩英戦争
一八六三	文久三	五	吉敷憲章館に入学		第一回長州征伐 四国艦隊下関を砲撃す
一八六四	元治一	六			

一八六五	慶応一	七	三月祖母没す 一一月母歌子没す 小郡の商人小原久治郎次女さだを継母に迎う	第二回長州征伐
一八六六	慶応二	八		征長軍撤退開始 この年諸国凶作　農民一揆　打毀し頻発す
一八六七	慶応三	九		大政奉還 王政復古の大号令を宣言す
一八六八	明治一	一〇	この年より明治六年まで岩井守介に従い漢学を学ぶ	戊辰戦争起る 明治改元
一八六九	明治二	一一		薩長土肥四藩主版籍奉還を上奏す
一八七〇	明治三	一二	横浜ミッションホーム設立（フェリス女学校前身）築地A六番館に女学校創立（後B六番館女学校　原女学校　新栄女学校　桜井女学校と統廃合を重ね女子学院となる）	
一八七一	明治四	一三	文部省設置 五少女米国に留学（吉益亮子　津田梅子　上田悌子　永井繁子　山川捨松） 横浜共立女学校創立	廃藩置県の詔 パリ・コミューン

一八七二	明治五	一四	湯田に父の開いた学塾の教育を助ける	学制を頒布 官立女学校（東京）京都府立新英学校及女紅場の設置
一八七三	明治六	一五	弟晋竹下家の養子となる	全国徴兵の詔 キリスト教禁止の高札撤去 地租改正条例布告 征韓論起る 民選議院設立を建白
一八七四	明治七	一六	一一月弟養家先で没す 一二月父小左衛門没す この年から八年四月まで山口県小郡の医師福田徳治方で調剤手となり物理学を学ぶ	東京女子師範学校の設置 青山女学院の創立
一八七五	明治八	一七	五月山口県教員養成所に第二期生として入学	跡見女学校　神戸英和女学校（神戸女学院の前身）照暗女学院（平安女学院の前身）及び新島襄による同志社英学校の創立
一八七六	明治九	一八	六月教員養成所を卒業し同県室津小学校訓導となる	桜井女学校の創立
一八七七	明治一〇	一九	一月二島小学校訓導（同三月まで） 夏　沢山保羅と相識りキリスト教に入信 郷里を出て神戸の従兄佐畑信之宅に寄寓 数ケ月後に大阪に行き　キリスト教の伝導師となることを決意する 一一月浪花教会で洗礼を受ける	官立東京女学校の廃止 同志社分校女紅場設立（同志社学院女学校の前身）
一八七八	明治一一	二〇	一月梅花女学校開校　同校教師となる	新聞紙条例　讒謗律制定 熊本神風連の乱　秋月の乱　萩の乱 西南の役 **英領インド帝国成立**

一八七九	明治一二	二一	福井藩士の女　服部ます江（万寿枝とも書く）と結婚	学制を廃止し教育令を公布 長崎活水女学校創立	国会期成同盟国会開設を上願
一八八〇	明治一三	二二		教育令を改正 東京法学社（法政大学の前身）明治法律学校（明治大学の前身）宮城女学校　横浜英和女学校の創立	集会条例制定
一八八一	明治一四	二三	一二月「婦女子の職務」出版	東京職工学校を設置（東京工業大学の前身）	自由党結成 国会開設の詔
一八八二	明治一五	二四	八月梅花女学校を辞し専心伝導に従事 年末　郡山浪花教会出張伝導所の専任となる	東京女子師範学校に予科を廃して附属高等女学校を開設 大隈重信らによる東京専門学校（早稲田大学の前身）遺愛女学校の創立	立憲改進党結成
一八八三	明治一六	二五	四月組合教会総会開催され沢山保羅「日本教会自給論」を主張	東京英学校青山に移転し東京英和学校と改称（青山学院の前身）	
一八八四	明治一七	二六	一月郡山教会を設立　専任牧師となる この年沢山保羅夫人没し娘いさ子を預る	東洋英和女学校　北陸女学校　大阪ウイルミナ女学校創立	群馬事件　加波山事件 飯田事件　名古屋事件起る 自由党解党

一八八五	明治一八	二七		「女学雑誌」創刊 教育令を再び改定 森有礼初代文部大臣に就任 明治女学校　華族女学校　英吉利法律学校（中央大学の前身）の創立 帝国大学令公布（東京大学を帝国大学と改称） 師範学校令　中学校令　小学校令　諸学校通則を公布 教科用図書検定条例を制定 弘前女学校　宮城女学校　松山女学校　共立女子職業学校創立 教科用図書検定規則を制定 哲学館（東洋大学の前身）香蘭女学校　静岡英和女学校　広島女学校　熊本女学校　北星女学校　大江女学校　捜真女学校　普連土女学校創立 女子独立学校（精華女学校の前身）前橋共愛女学校　岡山山陽女学校創立	清国と天津条約を締結 内閣制度を施行す（第一次伊藤内閣成る） 保安条例公布
一八八六	明治一九	二八	九月新潟教会へ転任 一一月新潟女学校を設立　校長となる	
一八八七	明治二〇	二九	三月沢山保羅没す 四月北越学館の創設に関係す 八月「増補婦女子乃職務」（福音社）を出版	
一八八八	明治二一	三〇	北陸において教会活動及び教育活動に尽力す	

一八八九	明治二二	三一		日本法律学校（日本大学の前身）金城女学校甲府英和女学校創立 大日本帝国憲法　皇室典範公布
一八九〇	明治二三	三二	一一月アメリカ留学を志し新潟教会および新潟女学校を辞す この年北越学館に教師として就任の麻生正蔵を知る　夫人病気のため一時渡米延期 一二月渡米の途につく	高等師範学校女子部を分離して女子高等師範学校とする 小学校令を公布 教育ニ関スル勅語発布 女子学院設置 全国廃娼同盟会結成 第一回帝国議会開く
一八九一	明治二四	三三	一月ボストン近郊ノース・アンドヴァーのレヴィット氏宅に着く　アンドヴァー神学院に入学　教授タッカー氏（社会学）の知遇を受く	教育と宗教との衝突論争（内村鑑三不敬事件） 婦人矯風会　子守学校を開設 私立学校連合会を結成 石井亮一　孤女院を設立（後の滝乃川学園） 高等女学校を尋常中学校の一種と定める
一八九二	明治二五	三四	六月アンドヴァー神学院を去り　九月クラーク大学に入学　教育部研究科に籍をおき女子教育を専攻する　各地の学校　諸施設を参観す	尚絅女学校　松蔭女学校創立
一八九三	明治二六	三五	九月英文「モダンパウロ」（沢山保羅伝）出版 一二月帰国の途につく この年米国各地の宗教活動　女子教育などの実地見学　調査に努力し多数の人々を訪問す	**ハワイ　合衆国保護領となる**

一八九四	明治二七	三六	一月帰朝　京都　服部他之助（義弟）宅に寄寓 三月梅花女学校校長となる	高等師範学校規程を制定 高等学校令を公布 女子高等師範学校規程を制定	**朝鮮に東学党の乱起る** 日英通商航海条約調印 日清戦争始まる
一八九五	明治二八	三七		高等女学校規程を制定	日清講和下関条約調印 独・露・仏の三国干渉 遼東半島還付
一八九六	明治二九	三八	二月「女子教育」（青木嵩山堂）出版 夏　梅花女学校校長を辞す　資金三〇万円の募金を予定し　大阪における女子大学設立計画を発表　内海忠勝　土倉庄三郎　広岡浅子等の賛助を得　東京においては伊藤博文　西園寺公望　大隈重信　渋沢栄一　森村市左衛門　板垣退助等に援助を乞う　年末に設立趣意書発表		
一八九七	明治三〇	三九	三月東京星ケ岡茶寮において第一回発起人会開催 帝国ホテルに貴衆両院議員を招待　第一回創立披露会を開催 四月「女子教育談」（青木嵩山堂）発行 五月大隈外務大臣邸で第一回創立委員会を開催 大阪中ノ島ホテルで第二回発起人会　第二回披露会を開催 八月「女子教育演説」（青木嵩山堂）発行 一〇月神戸帝国教育会大会の機会に女子教育演説会開催	京都帝国大学を設置 師範教育令を公布	
一八九八	明治三一	四〇	夫人万寿枝と離婚	女子聖学院創立	民法全編施行

一八九九	明治三二	四一		中学校令改定公布 実業学校令　高等女学校令公布 私立学校令公布 実践女学校創立
一九〇〇	明治三三	四二	五月大阪の創立委員会で女子大学建設地を東京に決定　大阪方面の寄附約五万円に達す 六月東京で創立委員会開催　明春四月を期して開校の予定を定める 三井家から東京目白台に敷地五五二〇坪の寄附を受ける 九月前夫人の万寿枝没す 一一月岩崎男外二九名の名で日本女子大学校設置認可願を東京府知事に提出　一二月二四日認可	小学校令を改定公布 津田梅子女子英学塾を創立 吉岡荒太　弥生夫妻東京女医学校創立
一九〇一	明治三四	四三	一月日本女子大学校長として東京府知事より認可 四月日本女子大学校開校式　第一回入学許可生徒五一〇名(家政学部八四　国文学部九一　英文学部一〇　英文予備科三七　高等女学校全学年二八八)　校舎二棟　寮舎三棟　教師館二棟ほか 九月皇后陛下より下賜金三〇〇〇円を賜う 一〇月第一回秋季大運動会を飛鳥山渋沢男邸で開催	中学校令施行規則制定 高等女学校令施行規則制定

一八九九	明治三二	四一		連合軍北京に入城(北清事変) 立憲政友会結成(総裁伊藤博文)
一九〇〇	明治三三	四二		愛国婦人会創立 社会民主党結成　即日禁止
一九〇一	明治三四	四三		

一九〇二	明治三五	四四	四月大学部校舎一棟増築 附属高女第一回卒業式　卒業生八二名 九月樺山伯の好意により同邸内に寮舎二棟建築　華山寮と名づける 一〇月第二回秋季大運動会を日本女子大学校庭で挙行 一二月森村豊明会の厚志による豊明寮開寮	教科書疑獄事件起る 三輪田女学校創立	日英同盟協約調印
一九〇三	明治三六	四五	四月樺山愛輔氏所有の地所二〇〇〇坪を購入 桜楓会発会式　各寮の命名式を行なう 七月「学報」第一号発刊（明治三七年一二月第四号で終刊）	専門学校令公布　実業学校令改正 国定教科書制度確立 東京女学校創立	日露戦争始まる 第一次日韓協約調印
一九〇四	明治三七	四六	一月私立日本女子大学校専門学校令により認可　三月一日から学校規則を専門学校令に準拠 三月「日本女子大学校週報」（謄写版刷）発行 四月日本女子大学校第一回卒業式　卒業生一二〇名 桜楓会第一回総会　桜楓会実業部開設 学監麻生正蔵欧米女子教育視察に出発 六月家庭週報（隔週）発刊　桜楓会発行 一〇月「第二維新を論じて我国教育の宿弊に及ぶ」を「教育時論」誌に発表 一二月教育学部設置発表	下田次郎「女子教育」を出版	
一九〇五	明治三八	四七	四月第五回創立記念式		第二次日英同盟協約調

			五月桜楓会「花紅葉」第一号発行 日本女子大学校財団法人となる　第一回評議員会開催 九月桜楓館落成　開館式を行なう　家庭週報毎週発行となる	印 日露講和ポーツマス条約調印 東京日比谷焼打事件 日本ＹＷＣＡ創立
一九〇六	明治三九	四八	三月学監麻生正蔵欧米視察より帰校 四月教育学部　小学校　幼稚園校舎　豊明館落成式 教育学部　附属豊明小学校　附属豊明幼稚園開校式 七月第一回毎月会（西園寺公望侯はじめ日本女子大学校評議員を中心とした教育研究会）開催 三井三郎助氏の好意による軽井沢三泉寮開寮 一一月日本女子大学校と桜楓会合同主催の秋季文芸会に各宮家より来校	華族女学校を学習院に併合	堺利彦ら日本社会党を結成
一九〇七	明治四〇	四九	四月本学年度より国文学部を文学部と改称 桜楓会主催図書館完備資金募金バザーを開く 若葉会成立（附属高等女学校同窓会） 一二月講演集第一発刊	義務教育年限を六年に延長 高等女学校令改正	三国協商（英・仏・露）成立
一九〇八	明治四一	五〇	四月藤田伝三郎氏寄贈香雪化学館の開館式及び前年落成の渋沢栄一氏寄贈の晩香寮の開寮式を併せ行なう 九月桜楓会　日本女子大学通信教育会を設立「女子大学議義」発行	奈良女子高等師範学校設置	「婦人の友」創刊 戊申詔書発布

一九〇九	明治四二	五一	六月家庭週報一時発行中止	高等女学校に実科の設置　実科高等女学校の設置を認める（高等女学校令の改正）	伊藤博文ハルビンで暗殺さる 韓国併合条約調印
一九一〇	明治四三	五二	七月英文雑誌「ライフ」発刊（明治四四年第六号で終刊） 八月女子教育反動化に際して　女子高等教育普及のため渋沢栄一氏　森村市左衛門氏とともに北越地方講演旅行（六日から一六日） 家政科第一部及び第二部に家事科中等教員無試験検定下付さる 英文「モダン・パウロ・イン・ジャパン」を再版（警醒社）		大逆事件判決 平塚らいてう「青鞜」を刊行 **清国に辛亥革命起る**
一九一一	明治四四	五三	四月創立一〇周年記念式挙行「日本女子大学の過去現在及び将来」を出版　旧華山寮庭に幼稚園舎新築　少女寮（氷香寮）開く 五月大阪　神戸　京都　岡山で日本女子大学校創立一〇周年記念講演のため　渋沢栄一氏　大隈重信氏　森村市左衛門氏とともに関西へ出発 「女子教育問題」（精美堂）発行 一一月「進歩と教育」（実業之日本社）発行		明治天皇崩御　大正天皇践祚 **中華民国成立**
一九一二	明治四五	五四	四月附属豊明小学校第一回卒業式　卒業生二〇名 本学年度から大正五年まで国文学部一時		

			廃止	
			六月「家庭週報」再刊	
			七月帰一協会第一回例会	
	大正一		八月教育視察及び帰一協会の趣旨を拡めるため欧米旅行に出発	
			一二月初旬イギリスへ渡る	
一九一三	大正二	五五	一月初旬フランスへ入る　つづいてドイツへ行く	
			三月帰朝	
			六月教育調査会々員となり「大学教育改善案」を提出する	教育調査会を設置
			七月小石川久堅町に桜楓会託児所開所	
			一〇月寺田氏所有地返却のため豊明寮　体操場移転	東北帝国大学に女子三名入学許可
			この年「帰一協会々報」発刊	
一九一四	大正三	五六	一月「新時代の教育」（博文館）発行	
			この年自助団を企画す	梅光女学院（下関）創立
一九一五	大正四	五七	五月桜楓会託児所小石川久堅町から巣鴨宮下へ移転　六月五日新築落成式	
			一一月御即位奉祝式を挙行　勲五等に叙せられ瑞宝章を授けられる	
一九一六	大正五	五八	七月インド詩人ラビンドラナート・タゴール来校　ギタンジャリ朗読	聖心女学院専門学校創立

第一次バルカン戦争始まる		
憲政擁護会第一回大会開催（東京）		
護憲運動各地に起る		
第二次バルカン戦争		
シーメンス事件起る		
第一次世界大戦起る		
ドイツに対し宣戦布告		
中国に対し二一カ条の要求を提出		
吉野作造民本主義を唱う		

			八月タゴール三泉寮で瞑想指導 「新婦人訓」（婦人文庫刊行会）発行 九月桜楓会修養会「天心団」結成	
一九一七	大正六	五九	四月教育学部廃止　師範家政学部設置　桜楓家政研究館落成式　皇后陛下（貞明皇后）行啓　校旗制定 七月軽井沢夏期寮において「軽井沢山上の生活」と題し一〇回にわたる講義を行なう 九月臨時教育会議委員となる 一〇月「世界統御の力」（博文館）発行 一一月発病　一二月四日腸チフスのため赤十字病院に入院	臨時教育会議を設置 全国小学校女教員大会開かる
一九一八	大正七	六〇	二月退院　国府津で静養 三月静養地より帰校 九月内臓の異常を自覚 「女子教育改善意見」（博文館）発行 一二月国府津に静養に赴く この年帝国教育会功牌を受く 女子総合大学設立を企画	臨時教育会議　女子教育の改善について答申 大学令　高等学校令公布 東京女子大学設立 女子学習院設立（学習院女子部独立）
一九一九	大正八	六〇	一月　六日帰京 一月一七日肝臓癌と診断 一月二九日関係者を集め告別講演「我が継承者に告ぐ」を行なう	帝国大学令　中学校令 小学校令の改正 臨時教育委員会を設置

			憲政会結成（総裁加藤高明） 「婦人公論」刊行 **インド自治要求高まる**	
			「主婦の友」創刊 **ソヴィエト政府成立** 石井ランシング協定発表	
			シベリア出兵 米騒動各地に起る 母性保護論争 **第一次世界大戦終る**	
			ヴェルサイユ平和条約 国際連盟規約調印 大日本労働総同盟友愛会発足	

		二月　一日病気見舞として皇后陛下よりお言葉と菓子を賜う 二月二五日桜楓会から高村光太郎氏に胸像製作を依頼する（昭和八年除幕） 二月二八日久保田護氏の勧めにより本校の三大綱領「信念徹底」「自発創生」「共同奉仕」を揮毫 三月　二日総合大学資金として皇后陛下より金一万円のご下賜を受く 三月　四日午前八時二〇分永眠　享年六〇歳 特旨をもって従五位に叙せられる 三月　八日教育関係者一同　成瀬氏哀悼女子高等教育問題講演会開催　総合大学達成援助の決議を行なう 三月　九日日本女子大学校告別式を行なう 四月　七日麻生正蔵　第二代日本女子大学校長に就任	
一九二〇	大正九	一月故成瀬校長告別講演記念日記念会開催（以後継続） 三月成瀬校長永逝一周年記念会 四月第二四回創立記念日に総合大学基金募集桜楓会員負担額が三〇万円に達したことを故成瀬校長の霊前に報告	東京帝国大学　聴講生として女子の入学を認める 高等女学校令を改正 実業学校令を改正

市川房枝ら新婦人協会結成 東京で最初のメーデー行わる 第一回国勢調査実施 南洋諸島に対する日本の委任統治正式に決定 ドイツ国民社会主義党（ナチス）綱領採択	

一九二一	大正一〇		教育評議会設置 羽仁もと子自由学園創立	原首相東京駅頭で刺殺さる ワシントン軍縮会議開かる 四ケ国協約調印
一九二二	大正一一	四月雑司ケ谷墓地の成瀬仁蔵墓碑除幕式（碑文撰および書は渋沢栄一　題字は西園寺公望）	全国女子教育者大会 福岡西南女学院創立	ワシントン海軍軍備制限条約調印 日本共産党結成（非合法） 婦人連盟結成
一九二八	昭和三	四月「成瀬先生伝」発刊		
一九三四	昭和九	三月成瀬仁蔵生誕地に記念碑建立（桜楓会山口支部）		

解説

本成瀬仁藏著作集第一巻には成瀬仁藏が、日本女子大学を創立するに至る明治三十四年（一九〇一年）春までに発表した著書、論文などをおさめた。成瀬仁藏が女子高等教育機関の創設という、当時にあっては、一般の理解の得難い仕事にかけた情熱と経緯を本書から知ることができよう。

以下収録したものについて、目次に従って解説する。

○『婦女子の職務』　明治十四年十二月刊　四六版　六十二頁　単行本

成瀬仁藏の処女出版である。時に二十三才。

本書出版に至るまでの略歴を述べると、安政五年（一八五八年）六月二十三日、長州藩山口宰判吉敷村（現在の山口市吉敷）において、同藩士の一門である吉敷毛利家に属する士族、成瀬小左衛門の長男として生まれた。母は歌子、同藩士族秦家から嫁した人である。禄高十六石、藩の祐筆をもつとめる下級武士の家であったが、曽祖父、祖父、父いずれも漢学の素養深く、子弟を集めて教育にあたっており、墓碑も門下生によって建てられているという教育家の家系であった。仁藏は始め、二藏といい、三才年長の姉久子があり、万延元年弟文吉（後に晋）が生まれた。

幕末の長州藩という、時代の一大焦点であり、風雲急をつげる状況の中で、刺戟をうけながら生長し、藩校吉敷憲章館にも学び勉学を深めていった。明治の変革によって、表高八石ばかりとなった成瀬家は、明治五年、湯田に家塾を開き、仁藏も若先生とよばれ手助けした。この間、一時小郡の医家で物理学などの修業をしたこともある。明治七

年末、新学制のため、教員養成が急務となり、山口にも山口縣教員養成所が設立されたので、翌八年五月、仁藏は第二回生として入学した。

仁藏はこの時すでに、淋しい家庭環境にあった。慶応元年、祖母および母を失い、商家からついになじむことのなかった継母さだを迎えたが、明治七年秋、弟が養家先で、二十日ばかり後に病床にあった父もなくなった。姉はすでに鈴木家の人となっていた。

養成所は主として洋学を修めた人々によって教鞭がとられ、入学当初は期待も大であったが、次第にその規則づくめの生活に満足できなくなったといわれる。しかし一年余の後卒業し、室津、上関などの小学校長となり、同時に郡視学の役割も果たしたという。

明治十年、仁藏十九才の夏その生涯の第一の転機となった澤山保羅との出会を得た。澤山は仁藏より六才年長やはり吉敷士族の出身者で、三年間の米国留学より帰り、大阪に浪花教会を設立し、キリスト教伝道に活躍し初めていた。仁藏は澤山の一時帰郷によってキリスト教に導かれ、吉敷を出て、神戸の従兄宅に滞在、ここで官吏となる道をとらず、キリスト者として生きることを決し、大阪に出て、浪花教会（組合教会派）の長老前神醇一のもとに寄寓した。以後、前神氏は成瀬仁藏の理解者、助力者となった。明治十年十一月三日、澤山牧師によって洗礼をうけた。翌十一年一月、浪花教会と梅本教会によって梅花女学校が創立されるに及んで、その主任教師となり、女子教育者としての第一歩をふみ出した。翌十二年三月梅花女学校生であり、浪花教会の信徒であった服部ます江（旧福井藩士服部彌太郎の長女）と結婚した。

梅花女学校における教育実践を基礎として、これまでのさまざまな婦人像—宣教師たちの婦人に対する態度には動かされることが多かったようである—を重ね合せて、キリスト教を信ずる者の立場から書かれたのが本書である。そ

のねらいは「女子教育ノ目的ヲ審ニセンガ爲メニ婦女子ノ職務ノ何タルヲ論述」（「出版々權御願」）したもので、翻案的な婦人啓蒙論が散見する程度のこの時期に貴重な婦人論となっている。澤山保羅はその序で「男女匹也（中略）特婦女者爲ニ人之母一而自有乙育ニ養世之兒輩一且立下之教導之基礎上之任焉、然則婦女者其學識之有無與ニ其性質之美惡一關ニ於世道人心之興敗一豈不ニ亦大一哉、余友成瀨君所レ著之婦女之職務者蓋有レ所レ見於此一歟、君爲ニ我梅花女學校教員一數ニ年干茲一教ニ導其生徒一也勉勵懇切、若此書所レ述乃其所ニ盡レ思而實驗一者也（下略）」と述べている。

なお、本書は明治二十年八月『增補婦女子乃職務』として再版され、その後も版を重ねたようである。（この場合は「ふじよしのしょくむ」のルビとなっている。）前著を出した翌年、梅花女学校の経営方針に批判的となり職を辞して伝道生活に入った。郡山で、つづいて新潟を中心として牧師の活動をつづけたが、明治十九年新潟女学校を設立し、同時に北越學館にも関係して、ふたたび学校教育を行うに至って増補再版したのである。骨子はさして変わらないが、叙述にもかなり手を加え、書物としての体裁をととのえると同時に、引用例なども豊富に、適切となった。序文は第三高等中學校教諭田村初太郎に変わり、目次はなく、構成は次のようになっている。

第一章　婦人の眞價
第二章　教育の重任
　第一節　教育の大切なる事
　第三節　子の教育は母の手を離れざることと
　第三節　母の德義
　第四節　母の學問

第五節　公の働作

第三章　家庭の重任

第一節　家庭は夫婦二本の柱より成る

第二節　家は國の基

第三節　家を治むるの難易

第四節　家の幸福並に品行

第五節　妻は其夫に從順なるべきこと

第六節　婚姻の大切なる事

第七節　家の經濟

第八節　一家の健康

第四章

増補版には第三章第五節に新しい一節が設けられた。ここに全文を転載する。引用の基準は凡例に従った。

第五節　妻は其夫に從順なるべきこと

婦人に最も必要なるものとは如何なるものか、學問か才智か裁縫か將又節檢することなるか、學問なき婦人は世事に暗く、才智なき婦人は事に錯雜多く裁縫を知らざる婦人は日常不都合少からず。殊に節險を務めざる婦人は無益の財を費す恐れあり。此の如く此等は必要なれども最も婦人に缺くべからざる德は柔和と謙遜なり。今日の婦人は僅に學問あればとて輙もすれば其夫を凌ぐ勢あるは實に愁ふべきことなり。聖書に曰く爾曹の妝飾は髪を辨み金を

掛け又衣を着るが如き外面の妝飾にあらず唯心の内の隠れたる人則壊るゝことなき柔和恬靜なる靈を以て妝飾とすべし此靈の妝飾は神の前に價貴きものなり（ペテロ前書三章三四節）婦人のために最も取らざることは我身の程を忘れて夫に斷ず不幸を訴へ我欲ふところの好良美服を得ざるより、其夫の月給少なく或は利潤の多からざるを口說き、遂に怒を移して器具を損し、夫に鎖細の過あるも忽ち怒聲を發して其罪を鳴して婦人に缺く可からざる柔和恬靜の德を失ふことなり。某地に屋根葺を職とせる二人暮しの夫婦あり。其夫は性來正直にして謙遜のの心深く事に耐忍び上は天帝に對して忠義を缺かず下は隣人に對して親切なるものなれども、才智稍鈍かりしが、その妻は性質烈しきものなれば、常に夫の働を見て切齒思をなし、時々は夫の働の鈍きを責て我もし男にてありたらんには必ず拔群の働をなし許多の金を儲け衣食住何吳となく不足せしむることなかるべし等と屢々怒鳴ける。一日夫は其地にある會堂の屋根を修覆する爲にと雇れ行く后に、その妻は甲某の細君は絹の衣服を着美しき帽子を被れり。是と申すも其夫が金儲をなす故なり。私の如きは結婚してより以來久しなれども、今に新き衣を製へしことなしなどゝある事なき事迄夫の過失を隣家の婦人に語り居る最中、數人の小兒走り來りて、爾の夫某殿は唯今會堂の屋根より落ちて直ちに死なれしと報するを聞くより、大に驚き夫の行狀正しかりしにも係らず、日比無禮をのみなせしことを遽に悟り且つ從來我身の人に敬はれしも偏に品行正しき夫の光ありし故なるに、今其夫を失ひては我身を顧みるもの更になからん。斯ては如何せん。實に今日と云ふ今日迄衣食住に何一つ不足なく過し來りしも皆夫の汗涕流して働き給ひし庇蔭なり。能よく考ふれば我夫は實に他の夫に勝りて正直なりしのみならず又平生此氣髓なるものをさへ深く愛せしは實に難有き事なりと心を責むる中に、數名の人々夫を舁來れり。前に小兒等が死せしと報せしは誤りにて、唯氣絕せしのみにて、其命には障支なければ、妻は先づ安堵の思をなし、以前と全く變りて、最親切に其夫を介抱しければ、夫も今迄は我妻は最不親切なるものとのみ思ひしが、さては親切なる心もありけん、

此困難の時に眞實を顯せるこそ有難けれと喜び、其后は互に和らぎ言に睦じく幸なる夫婦となりしとぞ。又其地に性急なる女ありしが其叔母は深く患ひて之を諭さんと思ひしかば、好機會をうかゞひて姪に向ひ、徐に、若し爾の死することあらば爾の夫は定めて世界に又となき柔和なる妻を娶るべしと云ひければ、其の婦人は大に憤り如何なれば斯る言を聞くものかなと詰りけるに、叔母は悃に諭しけるやう、昨日も爾の夫終日働き勞れはてゝ宅に歸りしとき、爾は土足の儘にて床を踏まれたりとて目に角立て責たり。假令床に泥がつきたるにもせよ夫も身の疲れ甚しきより斯くありしならん。故に此樣なる時には柔和なる言をもて斯床が汚れるなれば土足にてハ然すべからずと云ふて足るべし。怒るは決して要なきことなり。又先日は衣服を釘にて少しく破りしとて暴き言を發し、又何月何日には斯々斯樣なりしと其過を擧げて親切に諭せしところ、姪は手藝や學問等我身に少々得たる所を一々數へ立て其過を蔽はんとしければ、叔母は我愛する者よ、爾は他人に勝れたる事多くあるべし、然れども爾の缺ける柔和てふ德は婦人の德の中最も貴く且必要なるものぞよと云へば、成程婦人の德は左樣なるものならんか、なれども貴所の如く私が死したらんには吾夫は善き妻を娶る等と云ひ給ふは餘りの言ならんと怨ずるを、叔母は悃に爾自らその柔和なる妻となり得べし、さらば爾の夫の喜は柔和なる妻を再び娶りたるに倍すべしと戒られて、彼婦は大に感ずる所やありけん。爾后は實に柔和なる婦となりしと云ふ。然ば世の婦人等よ。一生を幸に送るも不幸に送るも、唯爾等の心一つにあるなれば、汚して尊大志をなし其夫に敬を失はざるやう小心すべし。

○『女子教育』明治二十九年二月刊　同四十年三月まで五版を重ねる。青木嵩山堂　菊版二百五十四頁　単行本
題字　西園寺公望　序　十州居士（細川潤）
新潟在住の間に、日本の女子教育向上のため、努力する意図を強固にした成瀬仁藏は、米国留学を志し、明治二十

三年末、渡米の途についた。米国ではアンドヴァー神学校で社会学を、クラーク大学では教育学を主として学び、各地の大学・女子大学の他、社会事業関係機関の訪問および実地調査を広くおこない、同二十七年一月帰国した。同年三月、梅花女學校々長に就任、教育改善にも努めたが、新しく女子高等教育機関を設置することを決定した。

これまでの教育体験と研究の蓄積の上に、今後の日本の女子教育をどのような教育理念と内容と方法とによって発展せしめ、さらに詳しく女子高等教育機関を設置するについて、社会的に知らしめる必要を感じ、本書が執筆された。明治二十八年末、青木嵩山堂の青木恆三郎との間に出版契約が成立し、契約書が交わされた。（『成瀬先生記念帳』四十六頁）本書の執筆については後に日本女子大學校第二代校長となった麻生正藏の助力によるところが大きかった。すなわち、

（前略）女子大學を我日本に創立する事は未曽有の最大困難事業であるから、それには天下有識者に多數の賛成者と有力者間に多數の助力者とを得る事が絶對に必要であったが故に、それに先達って女子大學教育の國家社會に必要なる所以を明確ならしむる必要を痛感し、その第一の準備事業として、創立者の女子大學教育意見を天下に公表唱道する爲めに、著書に着手すべく決定し、明治二十八年の初春から愈々これに着手し、特に同年の京都の熱夏全休業中を利用し、私の暑苦しい寓居に於て著述事業に專心協力するに至ったのである。勿論その内容の骨子は君が多年の經驗と在米研究との結果を提供して出來たものであるが、その執筆者は私であって、その章、項の配置按排から、内容の取捨、充實、正誤等は凡て主として私の分擔責任である。文章の如きは、全然當時の私の漢文口語調流なのである。その内容といひ、文章といひ、今日より之を觀れは、實に幼稚極まるものではあるが、當時の第一流の新聞誌は擧って筆を揃へて、長文の批評を掲げ、その内容文章の兩方面に對し、過分ともいふべき好評讃辭を浴びせかけてくれたのであった。（中略）

此の『女子教育』の著述が完成され、將に出版せんとするに際し、君は兩人の合著として公刊すべく主張された。併し私はそれを拒絶した處、君はその例言中に、私が著述上多大の助力を與へ特に執筆の勞を執った事を明記すべく主張されたけれども、之れも亦私は斷り、君一人の著述として出版したのである。言う迄もなく、此の『女子教育』の内容の骨子も設立趣意書及び規則書の要旨もその中心本尊は君であるのみならず、既述せる通り、女子大學設立事業其ものは君の二十才前後からの素志念願であった關係上、女子大學創立の本尊は君であるので、私はその共同設立たるべしとの君の懇望を固辭した以上にさうするのが當然であると考えたからであった。（「同志社教育から日本女子大學校教育へ」『成瀬先生書誌』一七頁）

このように、執筆については麻生正藏の手によるものであるが、その内容は成瀬仁藏の女子教育観そのものであったといえよう。

なお、麻生正藏は大分県の庄屋の家に元治元年生れ、漢學塾で修業後、京都同志社に入学、新島襄の教をうけ、卒業後、東京大学哲学科の選科生となり、傍ら一、二の学校で教鞭をとっていたが、北越學館に松村介石と共に招聘された。ここで成瀬仁藏と相知り交友が始まった。成瀬の渡米中は、同志社、梅花女学校で教鞭をとっていた。その帰国後よき助力者として一体となって活躍するに至った。

最後に、本書の反響について述べると、当時識者からかなりの好評をもって、迎えられたようである。『成瀬先生傳』（一一六頁）には六合雑誌、女學雑誌、東京日々新聞が引用され、その一部を知ることができる。今、東京日々新聞の一部を紹介すると、

従來、女子教育を説く既に其人あり、之に關するの著書亦從って少からずと雖も、未だ今日に至るまで、女子教

育の筌蹄たるべきものに乏しきは、啻に吾輩のみならず、世の教育に熱心なる者の私に憾みとする所なるべし。今者成瀬氏の著に係る本書を觀るに、素より嶄新奇峭平地に波瀾を起すの卓論なしと雖も、要するに氏は元と女子教育に經驗のある人、乃ち其學說の如き、調査の如き、頗る精覈にして鑿々能く旨緊に中り、且つ洋化主義と國粹主義の中庸を取って、說の我田に水を引くが如き偏執の嫌ひなきは、卽ち本書の一頭地を抽く所以なり。文章も亦平易流鴨にして澁難の跡なし。余輩は此書が女子教育に裨補すること少からざると共に、百日の大旱を滿すの雲霓たるを疑はざるなり。

以上のごとく本書によって、その教育觀を知らしめ、理解者、助力者、同調者を得ることが出来、女子高等教育機関設立の運動の基礎が成り、日本女子大學校が創立されたのであった。以後、本書は女子教育論の主要な文献として注目され、明治四十年に至るまで、五版を重ねていった。又、日本女子大學校の学生の間でも読まれたことは勿論であって、大岡蔦枝『成瀬仁藏先生』には「私共在学時代にはこの本を度々読んだことである」（二四〇頁）と記され、女子大學校の学生にも直接的な影響をもっていた事が知られる。

○『**女子教育談**』明治三十年四月刊　青木嵩山堂　袖珍　百七十三頁　単行本

明治三十年三月貴衆両議員を招いて、第一回創立披露会を催した。その時の諸氏の演說を主に集めたものである。目次は次のごとくである。

日本女子大學校を紹介す　　内海忠勝

高等女子教育の必要を論じ併せて其反對說に答ふ　　成瀬仁藏

女子教育と男子教育との關係　公爵　近衛篤麿
國民教育の複本位　伯爵　大隈重信
日本女子大學校設立に就て　候爵　蜂須賀茂韶
女子教育談　江原素六
女子教育談　島田三郎
女子教育振起策　成瀬仁藏

最後の論は、帝國教育會における演説筆記であるが本書に併載された。同様の題で、同年十月に神戸の女子教育演説會でも行ったようである。

○『**女子教育演説**』明治三十年八月刊　青木嵩山堂　袖珍　百五十二頁　単行本

明治三十年五月　大阪ホテルの第二回披露会に三百五十余名の参加者を前にして行われた演説を、前書と同様、集録したものである。

目次は、

女子教育問題に就て　成瀬仁藏
開會の趣旨　内海忠勝
日本女子大學校設立の必要　成瀬仁藏
女子教育談　伯爵　大隈重信
女子教育談　伯爵　土方久元

女子教育談　公爵　近衛篤麿
實驗談　伯爵　板垣退助
賛　文　男爵　山田信道
女子教育と女教員　男爵　北畠治房
女子教育と富國の關係　廣瀬宰平

始めの「女子教育問題に就て」は本書が出版される時に、巻頭論文として書かれたものである。

以上の三冊は、日本女子大學校設立の運動をよりひろく推進するに大きく役立った書であり、同時に、活動のさまざまな反響や経過を知る上に重要な書である。勿論、反対論も多く、「女學雑誌」明治三十年六月の第四百四十四号には次の記事がある。

然るに又往々として之が反對論を聞かざるにも非ずして其二三は此片々欄中に於て紹介したるが、近頃「女鑑」の齋木某が日本女子大學校をば欝勃たる野心の發動する處、皇國の大道を忘却し、皇國の風俗習慣に違背し、己を欺き人を迷はすものとして、成瀬氏の基督教徒たるを以て日本女子大學は國道に違背する邪教を輸入せんとするものなりなど論じ、其議論著々偏狹の小量を示して最も執るに足らざるの反對論なり、而も此事業を中傷するの說なり、これ口に國家の大道、仁義忠孝をいうを事とするもの〻自ら顧みて恥ぢずんばあらざるの言なり

其のほか『成瀬先生傳』（一八七頁以下）にもみられ、非難は開校後まで続いていく。

以下、当期の演説・寄稿・談話筆記などを**女子教育論雑載**としてまとめた。

○梅花女學校の設立を祝す　明治十一年一月梅花女子専門學校・梅花高等女學校『創立六十年史』及び梅花女子大学『梅花学園九十年小史』所収

先述したとおり、成瀬仁藏が始めて女子教育に携わることになった、梅花女學校創立時の祝辞である。現在残っているもっとも古いまとまった成瀬仁藏自身の言葉といえよう。

○太平洋航海中の所感　明治二十四年二月「女學雜誌」二百五十二号

「女學雜誌」は、明治前期の女子教育の逸材であり、明治女学校々長でもあった嚴本善治が編集に当っていた雜誌であり、当時の知的な青年男女に愛読されていた。成瀬仁藏が嚴本善治とどのような関係をもっていたか明らかではないが「女學雜誌」は渡米前から成瀬の動きを報じており、留学については、「成瀬君、近日女子教育上及び慈善事業上の視察の爲め、米國に渡行せんとす」（明治二十二年十月、第二百三十六号の記事）とあり全般的に好意ある紹介をその後も続けていく。成瀬仁藏もこの所感をはじめ幾つか稿を送っている。この所感は、渡米の船中からその感概をよせたものである。

○ウエレズレー女子大學觀察略記、㈠㈡　明治二十四年五月「女學雜誌」二百六十七号、二百六十九号

アンドヴァー神学校在学当時、右大学より紹待をうけ、四月十三日より一週間の滞在によって得た感想を書き送ったものである。ここに現われた多方面からするさまざまな感想は、創立後の日本女子大學校の教育に生かされていったと考えられる。

なお、後記するように日記（第九冊）の該当部分が欠けており、それをもとにこの記事が書かれたと推察される。

○日本女子大學校設立之趣旨　明治二十九年　パンフレット　一五頁

日本女子大學校設立の目的、方針、内容、さらにその意義などについて述べ、広く一般の理解を得るために草した。この趣旨は本学に文章の異なるものが他にあり、それには若干の語句の修正が加えられており、また『成瀬先生傳』一八一頁以下所載のものとも若干違っている。このパンフレットが最初のもので推進活動を行いながら、適宜訂正を加えていったものと考えられる。本趣旨も『女子教育』と同様、麻生正蔵の助力によった。すなわち

私達は明治二十九年二月、『女子教育』と言う書名の下に、僅に二百五十四頁の此の著書を發行し、それと同時に、日本女子大學校設立趣意書と日本女子大學校規則書とを兩人の合作の上、私が執筆して公表し、世に訴へると共に、有識者や有力者間に贈呈もし、又携へて、最初に大阪府知事内海忠勝男、第二に奈良縣大和の豪農土倉庄三郎氏、第三に、明治日本の女傑、大阪の廣岡淺子刀自を訪問し該書を贈呈し、女子大學創立の趣旨を述べ、その賛助を乞ふた。

とある。(『成瀬先生書誌』十八頁)

○本邦女子高等教育の程度　明治三十年三月「女學雜誌」四百三十八号

前著『女子教育』を比較的好評をもってとりあげた「女學雜誌」への掲載論文である。日本女子大學校の設立に東奔西走していた初期の、女子教育の現状把握について知ることができる。「女学雜誌」にはこの他「日本女子大學校の組織並大阪に設置する理由」などの論文があるが、重複するので割愛した。

○日本女子大學校設立に就て　明治三十年十二月「女子の友」一三号

明治三十年秋、全國聯合教育会が特に女子教育演説会を神戸市で催した際の記者による講演筆記である。

○女子大學談　明治三十三年十二月～一月「婦女新聞」三十三号～三十七号

婦女新聞の記者が「來年四月よりいよ〳〵開校させられるべき女子大學に就き、少しく聞くところあらんとして、

一日其創立者たり、其校長たる成瀬仁藏氏を小石川表町」の家に訪問し、対談した時の記事である。新聞の「訪問」欄に、成瀬仁藏先生《女子大學談》として五回にわたって分載されている。訪問は明治三十三年暮かと思われるが、十二月から翌年の一月にわたる号にのせられている。

○書簡

㈠は夫人宛の書簡として残っている唯一のものであり、内容から明治二十四年（一八九一年）の渡米直後のものと考えられる。

㈡ ㈢は白木（麻生）正藏宛で、やはり明治二十四年のもの。

㈣は白木（麻生）および松村介石両名宛の書簡である。アンドウァー神学校についての報告があり、その影響を知ることが出來る。なお、松村介石は麻生正藏と共に北越學館に招聘され、当學館で教鞭をとり、相知る仲であった。

㈤麻生正藏宛書簡、明治二十八年暮のものである。『女子教育』出版についての交渉の次第がわかる。

㈥より㈩までは、日本女子大學校設立運動を行っていた時期の麻生正藏宛ものであり、運動の経過を知ることができ、貴重な史料となっている。㈥明治二十九年、㈦同三十年、㈧～㈪同三十一年、㈫～㈩同三十二年の書簡である。

㈫澤山保羅宛書簡、大和郡山でキリスト教伝道に従事していた時の明治十六年二月十日附、はがき

㈬谷川熊五郎宛書簡、米国で澤山保羅伝を書くための資料の依頼状、明治二十五年のもの、谷川氏は澤山保羅の従兄弟にあたり、吉敷澤山家の家産管理につとめ、保羅の牧師活動のよき理解者であった。

㈭、㈬は梅花学園澤山保羅研究会編「澤山保羅研究4」による。

○日記　明治十五年八月から同二十六年五月まで、全十冊。

第一冊は前の部分が欠損しており、おそらく明治十五年八月十九日の日記と考えられる部分から始まり、同月二十八日に至る日記である。成瀬仁藏が梅花女學校の教師であった時期のものである。しかし厳密な意味での日記ではなく、種々のテーマに関する考を、聖書をよりどころとしながら記述し、それに日附が附随するといった態の日記である。このような日記の書き方は以後のそれも共通である。ここには梅花女學校の経営方針に反対し、辞職することになった「辭職願」の控が挿入されている。キリスト教の洗礼をうけた若き青年の思索のあとをたどると同時に、明治前期のミッションスクールの史料としても、貴重なものである。

第二冊も前欠であり、おそらく明治十六年八月二五日から十月十八日までの記事で、後もまた欠損している。

第三冊は明治十六年十月二十日　日記として一冊を構成している。

第四冊は明治十八年六月六日より同二十二日までである。

表紙に男女交際論の文字がみえるように、男女交際論のためのノートを日記に流用したものである。すなわち、原本はノートの半ばころから書きはじめ、終ってしまったので前に戻ってまた男女交際論の目次の次から書きつづけている。本日記の前二行がその目次である。従って本書にのせた日記は原本の丁替りどおりではない。

第五冊も前欠であり、おそらく明治十八年六月二十四日の記事より七月二十四日までの日記である。

第六冊は明治十八年七月二十五日より同八月二十六日までである。

第七冊は明治十八年九月十五日より十月二十七日までの日記である。

第八冊は明治十九年一月二十六日より、二十八日までの日記である。

第二冊より第八冊までは郡山を基点としてひろく牧師として伝道活動を行った時期に当る日記である。梅花女學校

の教師を辞して澤山保羅の下で伝道生活に入り、明治十六年一月それまで時々赴いていた郡山に移住して、宣教活動に専念し、翌々年の明治十七年正月にはささやかながら郡山教会が信者の手によって設立されるに至った。そこで按手礼をうけて牧師となり、奈良、伊勢、久居、津、松阪などにも講義所を設けたり、出張伝道を行うなど積極的な伝道活動を行った。明治十年代は外人宣教師中心の時代から日本人宣教師の手による伝道活動が著しくなる時期で、各地にリバイバル運動もみられた。明治十六年四月第二回宣教師大会で、浪花教会のレビットおよび澤山保羅は「教会自給論」を唱え、日本宣教の独立を主張し注目をあびた。成瀬仁藏にとっても、この教会自給論にあらわれているような組合教会派のもつピューリタン的なオーソドックスな信仰をもって宣教を積極的に行うといった性格に影響されるところ大であったろう。しかし伝道に際して、現実の苦難は大きく、そのためにも日記は心の支えであったと考えられる。明治初期のキリスト教伝道の目的、内容、方法などについての具体像を知ることができ、貴重な記録となっている。

第九冊は前欠であるが、明治二十四年四月十三日の日附のあと八頁が破られている。その日附と四月三十日の記事によって、ここに前掲の「ウェレズレー女子大學觀察略記」に相当する記事が入っていたものと考えられる。そのあと、おそらく四月二十九日と思われる記事より初まり、翌二十五年一月二十七日までの日記である。

第十冊は明治二十五年五月八日より、翌二十六年五月四日までである。この九冊目はほとんど英文で書かれているので左あき組とした。

以上二冊は、米国留学時代の日記である。なお、第八冊の次に、渡米直後から書いた日記があったようで、その一部が『成瀬先生傳』に解説を加えつつ、引用されているので、長文ではあるがここに転載する。

明治廿三年十一月十日。新潟を出立せり。

余、新潟に在る四年三ケ月、余初て新潟に來りし時、只一人の朋友ありしが、新潟を出づるときは、多くの親友有り、情を以て余を送れり。親友より余に贐として贈りし金員並に品物は、大凡百五十圓なりし。

十二月十六日横濱を出立、卅一日サンフランシスコに着す。其途中の感を記して、女學雜誌に投ず。

一日。二日。桑港に止る。

桑港に於ては、殆ど二千人の日本人ありて、日本人と支那人の區別をよく辨へ居れると雖も、日本人の評判至って惡しく、日本人を輕蔑すること甚く、一夜市中を朋友と歩行せしが或は謗り、或は池田と申す人の頭を打ちしものあり。殘念至極也。

三日。桑港を出立せり。

シカゴまで、多くは日本人といふことを知らざるのみならず、日本といふ國のあることさへ知らざるものありて、ある者は余等を獨逸人と思ひ、獨逸書を持來り、汝等は獨逸人乎と問ひしものあり。又ある時は余を見てトルコ人ならんと互に語り合ひしものあり。又中には日本人といふことを知るものありて、至って親切に取扱ひしと雖も、多くは支那人と見なし、ボウイ、或はジョンと呼ぶもありし。殘念至極ならずや。

（略）

金なしに米國へ來るは、ハヂカキに來る也。

（略）

八日。朝、スカッダー氏に面會す。一日馬車にて市中を見物せり。

十一日。早朝、ボストンに着す。初めて大西洋を見たり。太平洋を越え、西半球の大陸を過ぎ、再び大西洋に來り、感情交々起れり。

（略）

十一日。十時、Andver に着、舊友レビットに會う。

翌安息日會堂に參る。リバイバルは其日より初れり。

米國にては神の存在、キリストの救世主なることは疑なし。只之に從ふに苦むのみ。

レビット氏は七名の小兒あり、馬あり、車あり。然るに一名の僕婢をも置かず。悉く妻君とレビット氏之をなす。妻君は馬車に乘りて買物に出掛け、主人は馬にまくはし、說教等實に多忙也。米人のようによく働くは感服の至也。余も馬をかひ、木を割るなどの働を手傳ひ、大に身體の爲に益す。小兒も各々働を爲し居れり。通例は婢或は僕を置くよしなるが、余をして勉學せしむる爲之を省けり、云々。

横濱よりボストンまでの旅行日數は二十四日也。桑港に二日止り、シカゴウに一日止まれり。差引けば二十一日也、三週間也。其中二三日を除くの外は晴天也。

右の日記にあるやうに、先生はボストンに近いノース・アンドヴアーのサムマーヴィルで牧師をしてゐたレヴィット氏の家に迎へられて、その家族の一員になった。元來先生が渡米に就ては、新潟の老スカッダー博士が、先生の志望を知ると同時に、當時歸國してシカゴにゐた子息、及びレヴイット氏に書面を送り、三人の間で打合せをして先生を立たせたので、それに關する事務的なことは、具體的に先生に知らせてなかった。旅費がスカッダー氏（或はレビィット氏と共同で）送られたことも、レヴイット氏が先生を引受けて、學費の便宜を計るやうになってゐたことも、渡米後に始めて承知したのであった。レヴイット氏が自分の生活を切りつめて、先生の學費を補助することは、妻君以外の家族にすら祕してゐたのである。而してレ氏等の考へでは、先生をどこかの大學に入學させ、スカラーシップを取るか、又は他の方法を發見して、勉學させようといふ方針であったらしい。

さて先生は如何なる目的で渡米されたのであるか。この頃の先生の日記を見ると、自分の天職、目的、事業等に就いて、屢々記されてゐるが、二月廿日の條の中に

〔吾　天　職〕

教員にあらず、牧師にあらず、學者にあらず。

社會改良者なり。女子教導者なり。父母の相談相手也。創業者なり。人心興憤者也。

とある。その後の條に

〔吾生涯に可成事〕

吾目的は吾天職を終るにあり。吾天職は婦人を高め、德に進ませ、力と知識錬達を與へ、アイデアルホームを造らせ、人情を敦くし、國を富まし、家を富まし、人を幸にし、病より貧より救ひ、永遠の生命を得させ、罪を亡ぼし、理想的社會を造るにあり。（人種改良もあり）

故にこの建築の方、成功の道を講ずるにあり。實に短日月なれば、尤も必要、尤も入用のものゝみ可學。

更に又

〔余　の　目　的〕

世界の粹を蒐集して、世界第一の教育、家政、社會、會社、宗教を吾日本に建つるにあり。現在する粹を蒐集するに止まらず、尙ほ理想の眞理を發明するにあり。

さうして、「モーゼはイスライルを救ふ爲に四十年間野にこもつたが、自分は僅か四年間であるから、とても時が足らぬ」などとも記し、夫人に書き送つた書翰の中に「全く青年に歸り、白面書生を氣取り、否赤兒となり、今より大業を創むる覺悟をなせり」と記してあるのに、常時の心境がよく現はれてゐる。他の部分の記載をも參考して

綜合すれば、要するに先生の渡米の目的は、婦人を中心とし、家庭を基礎として、社會を改善し、國家民衆の生活と思想とを向上させ、以て理想的道德の世界を作るため、更に究極的には、天國をこの世に來らせるために宗教の基礎の上に立つて、科學的方法を捕捉することであつた。而して之が爲に知識を米國に求めるだけでなく、米國の人と事業と文字とを通して、世界の思潮と文化とに接觸し、その粹を採つて、日本改善の資料とされたことは、前にある通りである。

右のための、必要な研究題目として、先生は次の事項を擇ばれでゐる。

〔吾米國に於て可得事柄〕

英語。文明の基礎。學制。社會學。教育學。經濟學。神學。英文學。女子の職業。女學校。慈善事業。有名なる男女の學者、教育者、宗教家に面會すること。右視察の批評並に適用。家政學。富國の源。政事。人々の傳を讀む事。（一月廿六日）

その數日後の日記には

今此三年間に備ふ可き事件

（一）神學上の問題

神の存在、キリストの性、靈魂不滅

（二）道德の標準

（三）女子教育の方針

（四）女子教育實行の法策

（五）吾生涯の進路

（六）學理、視察、語學

右の準備全く整ふ時は歸朝の日也。

生涯は甚だ短ければ、一日一時も有益に用ひ、及ぶ限り神速に、右六ケ條を手中に得べし。

などゝある。一月末に故國の友人に送つた手紙に、十六の研究題目を定め、一題につき二ケ月の割合で卒業する豫定とあるのは、多分右の前段に相當するのであらう。併し追々に訂正されたり、增加されたりしてゐる。

右のやうな計畫で、學術の方では、改善事業の基礎的知識を得るため、まづ第一着に社會學を研究することに、渡米以前から豫定されてゐたもののやうである。然るに社會學はまだ新しい學科であつて、それを講ずる十分な學者も學校も、當時の米國にあまりなかつたのであるが、アンドヴアーのセオロンカル・セミナリーの教授タツカー氏は、社會學者として一方のオーソリチーであると同時に、全米の社會運動の指導者であるやうな地位に居り、殊に德望家で、學院の柱石とも稱せられる人であつた。又其處の圖書館は完備したもので、中にも社會學に關する書籍が總て網羅されてゐた。附近には別に數個の立派な圖書館もあり、地方には教へを受けたい人物も、視察すべき有益な事業も多かつた上に、宗教的修養には好適地であり、殊にこの學院は平素欽仰してゐた先輩新島襄氏の出身校で、知友の村井知至、增野町悅興氏等も在學中であつたので、旁々先生は到着早々此の學院に入學されたのであつた。

併し先生は此處を卒業する積りではなかつた。大學に入れたいといふレ氏等の希望もあり、女子大學設立の着想を、この時早く既に胸裡に藏してゐた先生は、將來大學を率ゐるためには學位を持つてゐる方が好都合であらう。又神學院卒業では、舊い形式的宗教で、世人の理解を制限される不都合を釀すかも知れないと考へて、一時は九月の學期を待つて、ハーバート大學に入學する計畫を立てた。併しそのためには、どうしても先生の事情に許されな

い時間を要すること、先生の方針に副はない學科を履修しなくてはならないことの理由から、その實行を止めにされたのである。又どこか師範學校で教育を研究しようかとも考へたが、これも同樣の理由から止めにされた。

一方タッカー氏の講義は非常に有益なもので、先生の目的に適合するやうな內容を持つてゐた。その上タッカー氏はよく先生の目的志望を理解し、かつ大に同感し、前例のないスペシアル・ナチューデントとして、學院の正規に拘らず、好むがまゝの自由な研究をすることの出來るやうに、取りはからつてくれた。而して先生一人のために、特に時間を設けて、講養、解疑指導の勞をとることを吝まなかつた。それから又スカラーシップをも取ることにしてくれたので、先生は愈々こゝで約一年間、社會學を中心に研究した後、クラーク大學その他の大學に移つて、やはり一年間位、女子教育を主題にした研究を試み、その後の時間を、實地の見學、訪問等に費すことに決して、その際の質問尋求の細項數十條を定めてゐられる。而して前段に掲げた研究事項は、學校で勉學する傍ら、右のやうな實地的方法、書翰の交換、圖書館等によってその研究を進めるといふ方針であった。（同書百八頁以下）同じく『成瀨先生傳』「宗教方面の進展」（百三十五頁以下）の項および『日本女子大學校四拾年史』アメリカ留學時代の項にも若干この期の日記の引用がみえる。

初の約九カ月間はレヴィット宅に寄留し、後の約一年間はアンドヴァー神学院寄宿舎に入った。明治二十五年（一八九二年）九月ごろクラーク大学教育学部研究科に移ったが、当時のホール総長は成瀨仁蔵の女子教育研究に期待をかけたと思われ、滞米延長をすゝめた。しかし実状では困難で、勉学のかたわら各地の学校や教会を訪問し、ある時は宗教や日本に関連する講演をし、明治二十四年の四月ごろからは計画どおり、大学での研究から、宗教、女子教育、社会事業関係の実施調査、関係者の訪問などに移り、勢力的に行動して、同年暮、帰国の途についた。

当時の米国は独占資本と革新主義の対立期であり、社会的宗教論や社会改革運動が高まりつつあった。この中でア

ンドヴァー神学校は単なる伝道士養成校ではなく、神学研究に力を入れ、タッカー教授のように新しい社会学を基礎に社会的にも指導的地位にある人物がいた。

このような米国社会の状況が、一日本人にどのように受けとられたかを知る事は意義深いものがあろう。また、これらの日記を通じて成瀬仁蔵の中に、社会改良や社会的宗教を基底とする女子大学の設立のさまざまな構想が、熟していったことが、或程度伺うことができるように思う。

日記に類するものとして、この他に明治十五年から明治二十七年にわたるメモやノート、雑記などが残っているが、今回は収録しなかった。

○『A Modern Paul in Japan』 明治四十三年九月刊　警醒社　洋書　菊版　百十七頁

明治二十六年（一八九三年）アメリカにおいて出版された『Modern Paul』（二十版を重ねたといわれる）を日本で、復刻したものによった。一八九三年版と一九一〇年版を用いたと察せられる。澤山保羅については、若干ふれてきたが、幼名馬之進、嘉永五年三月二十三日、成瀬仁蔵と同郷に長州藩士の子として生まれ、明治三年神戸に出、同五年アメリカに渡り、ノース・ウェスタン大学を卒業し宣教の道を選んで名を保羅と改め、明治九年五月帰国、牧師となり、明治十年一月浪花教会を設立し、つづいて梅花女學校を有志と共に創立、伝道と教育にその短い生涯を熱焼させて、明治二十年、病にたおれた。

本書は、アンドヴァー神学校在学時代に書いたのではないかと推定されるが、『成瀬先生傳』には澤山保羅伝を書いた時の草稿があり、それには著作の理由を次のように記している、として紹介してある。

「余當國に來り、日本古來の宗教、及びキリスト教、教育、風俗等につき、問はるゝこと屢々にして、時には其或點に於て、誤解甚しきに驚くことあり、又一方のみ見えて、他方の暗きを感ずること屢々なりき。かつ余は大に澤山氏と關係を有するものなれば、氏の傳を綴るの責任あるを感ずること切なり。終に筆を取つて之を試む。」(『成瀬先生傳』百二十五頁)

日記・書簡にも本書の就筆に言及した部分があるが、澤山保羅の紹介と同時に日本の事情を知らせる目的が多分にあったと考えられ、従って成瀬仁蔵の自伝的要素も強い。

あとがき

本「成瀬仁蔵著作集」全三巻は日本女子大学創立七十周年記念事業の一として企画され、昭和四十六年秋、出版分科会の中に著作集委員会が構成され、日本女子大学女子教育研究所が具体的に編集事務を推進する役割を担当することに決して編纂にとりかかった。以後、鋭意努力を重ねてきたが、ここにその第一巻を出版する運びとなった。

成瀬仁蔵先生の著作類の出版は、日本女子大学の今日までの歩みの中で、さまざまな形で行なわれており、単行本として、シリーズとして、写真集として、時には必要部分のガリ版ずり抜萃として出されている。これらは絶えず在学生や教職員や卒業生（桜楓会員）の間での研究会のテキストとして使用せられ、繰返し熱心に熟読され、創立者の教育精神の理解と継承発展の為に役立てられてきた。本著作集はそのような歴史の積み重ねの上にはじめて編集され得たといってよい。第一巻についていえば『婦女子之職務』は昭和初期のガリ版ずりの本が一つの手がかりとなり、書簡は『成瀬先生記念帖』が、日記その他は学生、卒業生、教員の協力によるガリ版ずりの復刻『成瀬仁蔵先生研究資料シリーズ一―七』が基礎となっている。

著作集委員会の発足当初の委員長は有賀喜左衛門前学長であり、本著作集の背文字をも御書きいただいた。背文字は上代たの元学長にはじめ御願申し上げたが、先生の御事情で御書きいただけなかったことは大変残念である。顧問の西原慶一先生には編集上の細かな点まで御指示下さり、柚トミエ様には出版上の御教示を得るなど、各委員の方々から御多忙の中を種々な御助言と御協力をいただいた。なお、英文の部分については主として菅支那先生に校閲をいただき、特に『A Modern Paul in Japan』については英文学科師岡愛子教授及び Dennis Keene 助教授をわずらわせた。又、口絵写真の中、

浪花教会には貴重な記録を提供していただいた。

皆々様に厚く御礼申し上げる次第である。

何分にも本著作集第一巻は明治前期のものが中心であるため、印刷の不統一、復刻本の再検討その他思わぬ難関が数多く、研究所諸姉の協力にまつこと大であった。研究員の真橋美智子さん、非常勤の国吉瑤子さんに主として担当していただき、加島真理子・岩船薫・松平慶子さんにも助けていただいた。又本のレイアウト、印刷などは大日本印刷株式会社の宮方正二、根岸佐雄、最終段階で佐伯安江の諸氏が担当されたが、難問や訂正の多い手数のかかる仕事に種々御配慮いただいた。併せて深く感謝申し上げたい。

なお、第一巻は思わずも年月をついやしたので、第二、第三巻は出来る限り早期に出版したいと念じている。大方の御叱正と御鞭達を御願する次第である。

（中　嶌　邦　記）

昭和四十九年六月

日本女子大学創立七十周年記念出版分科会

成瀬仁蔵著作集委員会

委員長　有賀喜左衛門（昭和四十六年四月より同四十八年三月まで）

道　喜美代（昭和四十七年四月より）

副委員長　中嶌　邦

委員　中島　武雄

著作集委員会顧問　西原　慶一

柚　トミエ

麻生　誠

同専門委員　菅　支那

長田　喜和

源　了園

一番ヶ瀬康子

同　委員（幹事）　合田　信子

石川　ムメ

午頭　栄子

五十嵐康祐

真橋美智子（昭和四十七年一月より）

昭和四九年六月二〇日印刷
昭和四九年六月二三日発行

成瀬仁蔵著作集　第一巻

編集　東京都文京区目白台二丁目八番一号
日本女子大学創立七十周年記念出版分科会
成瀬仁蔵著作集委員会
代表者　道　喜美代

印刷所　東京都新宿区市谷加賀町一丁目一二番地
大日本印刷株式会社

発行所　東京都文京区目白台二丁目八番一号
日本女子大学